

# 社会事象に対する感情反応に関する予備的検討

## —無反応にかかわる要因とその意味—

木野和代

### 1. 問題と目的

現代青少年の感情経験の理解に関心が向けられるようになって久しい。その背景には、過度な敵意・攻撃性との関連が予想される刑事事件や問題行動の過激化・低年齢化が問題視されるようになったことがあるといえよう。

現代青少年の感情に関しては、その変調に関する言及がみられるようになり（巖谷, 2001など）、また、速水・丹羽（2002）はその変化の実証を試みている。こうした現代青少年の感情現象に焦点を当てた研究の中で興味深いものの一つに、Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan（2004）による現代青年の感情経験と有能感に関する研究がある。Hayamizu et al.（2004）は、自分自身が関わった出来事に対して生起する感情反応のみならず、他者に起こった出来事、それも身近な他者というよりは広く社会で起こった出来事に対して生起する感情反応を扱っている。そして仮想的有能感の高い高校生は、社会で起こる否定的事象に対して怒りや悲しみを感じるというよりも、むしろ何も感じないことがしばしばあることが報告されている。またこのような事象に対して中学生・高校生は、成人に比べて何も感じないという反応をしがちであることも見いだされている（Hayamizu, Kino, & Takagi, 2007）。現代青少年の感情反応をとらえる上では、自己のみならず他者や世間一般で起こった出来事への感情反応も扱っていくことには一定の意義があると考えられる。本研究では、現代青少年の感情経験のなかでもとくに、他者あるいは世間で起こった出来事に対する感情反応、すなわち「非当事者としての感情反応」に関する検討を行う。

非当事者としての感情反応の背後に仮定される「共感性」をはじめ、青少年の社会性の発達には教育界で注目されるテーマの一つであり、自分に起こった出来事ではなく、他者や社会で起こった出来事に対して感情反応を生起しうるかどうかは、感情の基礎的な研究のみならず、青少年の健全育成にも資するものといえよう。しかし、これまでの感情経験に主眼を当てた心理学的研究は、自分が当事者として直接関与することを前提とした出来事に対する感情反応を扱ったものがほとんどである。同様に日常的でありながら、より複雑で社会的な「非当事者としての感情反応」を主題として包括的に扱った実証研究は多くはない。妬みやシャーデンフロイデといった特定の感情について（澤田, 2005, 2008など）や、援助行動などの対人行動との関連において限定的に検討されてきた程度である（Weiner, 1995など）。

そのようななか、山本（2005, 2007, 2009）は非当事者としての感情反応を「三項関係情動」と名づけ、その生起要因に関する研究に精力的に取り組んでいる。研究にあたって山本は、これらの感情反応を、社会的比較理論に基づくSmith（2000）のモデルと対応させて整理している。つまり、自分には直接的な利害の及ばない事象について良い-悪い出来事という軸と、これらの事象に対する他者と同化的-対比的感情の軸を想定し、これらの2軸によって三項関係情動の概念整理を行った。ここで、他者と同化的感情とは他者の感情と同質の感情を意味し、他者と対比的感情とは他者の感情とは対極をなす感情を意味する。具体的には、他者にとって良い出来事が起こった場合には、他者と同化的感情として共感的喜び（empathic joy）を、対比的感情として妬み（envy）を代表的な感情として位置づけ、他者にとって悪い出来事が起こった場合には、他者と同化的感情として共感（empathy）や共感的苦痛（empathic distress）を、対比的感情としてシャデンフロイデ（shadenfreude）を代表的なものとして位置づけている。そして、他者に良い出来事が起こった状況（山本, 2005, 2009）あるいは悪い出来事が起こった状況（山本, 2007）に限定して、これらの感情の特性とその差異を生み出す規定因に関する検討を進めている。本来複雑な様相を呈する感情を同化的か対比的かで大別し、これらを対極的に扱ってはいるが、非当事者としての感情反応の生起を理解する枠組みとしては有用である。

しかし、他者に起こった肯定的あるいは否定的出来事に対する感情反応としては、当事者の心的状態と同化的な場合や対比的な場合以外にも、両価的・複雑な感情（ambivalent / complicated emotion）を抱くこともあろう。これは、山本（2005）自身が三項関係情動の概念図（p. 373, 図1）の中に含めているものであるが、同化的-対比的という分類には対応しておらず、これらのみで他者に起こった出来事への感情反応をとらえることは困難といえよう。また、いずれの反応もみられない、つまり、無反応（無関心や無感情）といった反応も考えられる。これは、先述のHayamizu et al.（2004）の研究のなかで、高校生のなかには社会で起こる否定的事象に対して何も感じない者が少なからず存在することからも明らかである。他者あるいは世間で起こった出来事への感情反応は本来複雑なものであると考えられ、その生起メカニズムをとらえるには、同化的反応と対比的反応以外についても検討をすすめる必要があるだろう。

また、Hayamizu et al.（2004）の研究では、とりあげられた社会事象の意味づけが十分に行われているとはいえ、結果の解釈には幾分議論の余地がある。そして、扱われた事象は否定的なものに偏っており、肯定的事象に対する感情反応との関連については検討がなされていない。青少年の感情理解に向けては、感情喚起刺激の性質を踏まえたより精緻な検討が必要と考えられる。

ところで、このような非当事者としての感情反応の機能について、山本（2009）は長期的にみて良好な社会的適応に結びつくものと述べている。他者あるいは社会で起こった出来事に対して感情反応を示すことは、他者に対して特定の印象を与えるものであり、社会生活を円滑に

當む上で、重要な役割を果たすと考えられる。そうであるとすれば、社会事象に対して何も感じない、ということにはどのような意味があるのであろうか。そもそも無反応であるのは、全く何も感じていないということの意味するものととらえてよいのであろうか。本来何らかの感情を感じているにもかかわらず、それを認識・言語化できない、あるいは、社会的に望ましくないために隠蔽しているということもあるように思われる。

そこで本研究では、肯定的・否定的な社会事象に対する無反応に注目して、これに関わる個人要因・状況要因の検討と無反応の意味の把握を試みる。

社会事象に対する感情反応を左右する要因の一つとしては、他者軽視に基づく仮想的有能感の高さが無反応にかかわっている可能性が指摘されている (Hayamizu et al., 2004, 2007)。仮想的有能感は、世間一般の他者をよく知ろうともせず一方的に見下すような態度から生じるものであることを考えると、社会事象に無反応であることは、他者に対する関心・関与の低さとの関連が予想される。そこで本研究では、単純な行動レベルでこれをとらえることとした。具体的な行動として扱えば、無反応への介入の余地を検討する場合には有益な知見となりうるからである。そこでこの指標として、家族や近所の人へのあいさつの有無、社会的スキルをとりあげることとする。家族や近所の人へのあいさつの有無を、他者への関心・関与の高さとして単純におきかえることはできないが、あいさつをする人ほど、他者、ひいては社会に目を向け、関わっていかこうとする意欲が高く、社会的な事象への感情反応もみられると考えられる。社会的スキルについては、高い人は低い人に比べて、他者との相互作用が円滑であることから、人づきあいにおいて苦を感じることが相対的に低く、他者への関与に対する抵抗が少ないであろう。また、対人的な相互作用において的確に社会的スキルを発揮できること自体は、視点取得能力の高さに支えられたものと考えられ、他者への関心の高さが関わっているであろう。したがって、社会的スキルの高い人ほど、他者への関心・関与の高さから、他者あるいは社会で起こった出来事であっても何らかの感情反応を示すと考えられる。

次に、状況要因について考えてみると、出来事が誰に降りかかったものなのかということが結果を左右する要因の一つとしてあげられよう。山本 (2009) は、共感的喜び (同化的感情) と妬み (対比的感情) の発生に関与する要因として、他者との関係性をとりあげ、親密さが高いほど共感的喜びが高いことを示している。この研究では無反応を扱っておらず、同化的感情と対比的感情のいずれを感じるのかという点のみに焦点があるが、他者との親しさの程度が生起する感情の種類に影響を与えるといえる。無反応を扱った木野 (2006) の研究で示された結果からは、親しい人に起こった出来事よりも顔見知り程度の人に起こった出来事の方が、無反応な傾向にあることがみてとれる。これは、身近な他者である方が、感情移入が起こりやすいと考えられること、また社会的比較の対象として捉えられやすくなる可能性があることによるものであろう。以上から、社会事象が親しい人に起こったと考えられる場合には、見知らぬ他

者に起こった出来事に対してよりも感情反応が起こりやすいと考えられる。既述のように、本研究では感情喚起刺激として提示する社会事象の種類として、否定的事象と肯定的事象をとりあげる。この際、これらが親しい人に起こった場合についての回答も求めることとする。

また、認知評価理論に関する先行研究を概観した唐沢（1996）は、感情生起にかかわる次元として出来事の重要性の評価は、感情の強さの決定にかかわるものであると述べている。これは主に個人に起こった出来事についての感情反応に関する言及であろうが、他者に起こった出来事の場合にも適用できると考えられる。つまり、他者に起こった出来事の重要性が高いほど何らかの感情反応に結びつき、無反応である可能性は低くなると思われる。そこで否定的なニュースについては、深刻さの程度が異なると考えられる2種類の事象を用意する。

以上から、本研究では特に無反応であることに注目し、以下の3点の検討を行う。第一に、無反応と関連する個人要因および状況要因を探る。具体的には、個人要因として他者への関心・関与を、状況要因としては（1）他者との関係性（親密な他者か否か）、（2）出来事が否定的か肯定的か、（3）出来事の重要性（深刻さ。否定的出来事のみ）をとりあげ（結果として5水準とりあげることとなる）、主として質問紙調査により検討する。方法で後述するように、調査内容①は個人要因、調査内容②は状況要因に関わるものである。

第二に、無反応であることの意味を他の感情反応（同化的感情や対比的感情など）との関連から考える。このために、後述の調査内容②の「同化的感情、対比的感情、無反応、複雑な気持ち」に関する評定値を用いてクラスター分析を行う。

第三に、無反応である理由や無反応な人に対する評価を、面接調査により検討する。非当事者としての感情反応の本質に接近するためには、聞き取り調査で、直接やり取りしながら検討することも必要である。探索的な部分是否めないが、今後の研究展開を視野に、非当事者としての感情反応についての考え方について面接調査を行うこととした。本研究ではこの結果も併せて紹介する。本来ならば同化的、対比的感情反応、両面的・複雑な感情反応なども含めた非当事者感情についても追求したいところであるが、今回は初段の研究として自分以外の他者や社会で起こった出来事に対する無反応の意味の明確化を試みることにした。

## 2. 方法

### 2-1. 質問紙調査

(1) **対象**：広島県および愛知県内の大学に通う大学生244名（男性137名、女性102名、不明5名）を対象に質問紙調査を実施した。また、後述の面接調査の回答者5名（男性3名、女性2名）にも同じ調査用紙に対する回答を求めた。全回答者の年齢平均は19.25（SD=1.32）歳であった。

(2) **調査内容**：①対人行動、②社会的事象に対する感情反応、および③自己および他者への感

情傾向についてたずねた。ただし本研究では、以下に詳述する①②のみを分析対象とする。

①対人行動:家族に対する朝のあいさつ(現在,一人暮らしの人は実家で),近所の人に対するあいさつの有無をたずねる項目と社会的スキル尺度を用いた。社会的スキル尺度は,菊池(1988)によるKiSS-18(Kikuchi's Social Skill Scale)の意味内容が不明確な項目を一部改変して使用した(全18項目)。KiSS-18は,Goldstein, Gershaw, & Sprafkin(1984)の青年期における6つの基本的な社会的スキル(初歩的な,高度の,感情処理の,攻撃に代わる,ストレスを処理する,計画のスキル)を測定する尺度(50項目)に基づき作成されたものである。各項目について普段どの程度できるかを「1:いつもそうでない」から「5:いつもそうだ」までの5段階で評定を求めた。

②社会事象に対する感情反応:調査実施当時から約2年前にまでの間にニュース等でとりあげられ,注目を集めた肯定的あるいは否定的事象をとりあげ,これらに対する感情反応をたずねた。具体的には,A)高校の履修漏れ問題による補習(否定的),B)日本のスポーツ選手の世界的活躍(肯定的),C)新潟県中越地震の被害(否定的),を肯定的あるいは否定的事象としてとりあげた。否定的事象のうち,事象Cは多くの死傷者を出すなど,深刻さの程度が事象Aよりも高いであろうことを想定して選定した。これら3種類の事象は,特定の他者を想定させるものではなく,漠然と広い範囲を示すような表現の刺激文で提示した。また,事象A・Bに関しては,親しい人に起こった出来事だった場合を想定したものも提示し,計5種類の刺激事象についての回答を求めた〔表1参照。以下,A1)履修漏れによる補習,A2)履修漏れによる補習(親しい人),B1)スポーツ選手の活躍,B2)スポーツ選手の活躍(親しい人),C)中越地震の被害,と略記〕。各事象に対する感情反応項目は,木野(2006)の研究において使用されたものを再検討して選定した。同化的反応,対比的反応,無反応,複雑な気持ちに関する項目からなる。ただし,刺激事象Cに関しては,対比的感情を設けることが困難であったため,他者指向的な意味が弱いと考えられる恐怖感情をとりあげた(具体的な項目は表2参照)。いずれも,「1:全くあてはまらない」から「5:とてもよくあてはまる」までの5段階で評定を求めた。

表1. 調査で用いた社会事象の一覧

A 1)	高校の履修漏れ問題による補習(否定的・一般的ニュースとして)
A 2)	高校の履修漏れ問題による補習(否定的・親しい人の場合)
B 1)	日本のスポーツ選手の世界的活躍(肯定的・一般的ニュースとして)
B 2)	日本のスポーツ選手の世界的活躍(肯定的・親しい人の場合)
C)	新潟県中越地震の被害(否定的)



表 2. 調査で用いた感情反応項目の一覧

＜刺激事象ごとに異なる項目＞			
	A) 履修漏れによる補習	B) スポーツ選手の活躍	C) 中越地震の被害
同化的感情	悲しい気持ちになる やるせなく思う	うれしい 良かったと思う	悲しい気持ちになる やるせなく思う
対比的（恐怖） 感情	自業自得だと思う いい気味だと思う	うらやましく感じる 焦りを感じる	恐ろしくなる 怖いと思う
＜刺激事象共通の項目＞			
無反応	所詮自分には関係ないことだと思う 何も感じない		
複雑な気持ち	様々な感情が入り混じった気持ち 複雑な気分になる		

(3) 手続き：調査用紙の配布は授業時間を利用して行い、回収にあたっては授業時間内外の可能なときに提出を求めた。調査協力は任意であることを伝え、無記名式で回答を求めた。回答所要時間は10～15分であった。ただし、後述の面接回答者には、事後の面接調査への協力を求め同意を得た段階で、回答用紙を手渡し、面接時に回答用紙を回収した。調査実施時期は、2006年12月から2007年1月および3月上旬であった。

## 2-2. 面接調査

(1) 対象および手続き：20代前半の男性3名、女性2名を対象に個別の半構造化面接を行った。面接の所用時間は、インストラクションを含め一人あたり40分程度であった。面接に先立ち、前述の質問紙調査への回答を事前に依頼しておいた。面接内容は、本人の同意を得て録音された。実施時期は2007年3月上旬であった。

(2) 面接内容：先述の質問紙調査の内容を参考に構成した。まず、刺激事象としては、質問紙調査でとりあげたものを多少変更し、[A] ライブドアの堀江貴文社長の逮捕（否定的）、[B] 冬季オリンピックでの荒川静香選手の金メダル獲得（肯定的）、[C] J R 福知山線の脱線事故の被害（否定的）、[D] 新潟県中越地震の被害（否定的）、の4種類をとりあげた。そして、これらを面接対象者に提示し、印象に残っている順に並べさせた。

次に、最も印象に残ったニュースについていくつかの質問を行った。最も印象に残ったニュースが肯定的なものであった場合（つまり [B] であった場合）には2つ目に印象が強いニュースについても同様の質問への回答を求めた。これは、否定的事象については全ての回答者からいずれかの事象について回答を得られるように配慮したことによる。

本研究でとりあげる結果は、以下の3つの質問への回答である；質問①：何も感じない人が

いるとしたら、それはどのような人だと思いか、どうして何も感じないのだと思いか、質問②：実際の気持ちを隠すことがあるとしたら、それはなぜか、質問③：どのような感情を感じる人に好感をもつか（同化的感情、対比的感情（または恐怖）、複雑な感情、無反応、怒りを例示し、その中から好感が高い順にあげ、その理由も）。この面接調査は本来、出来事の認知的評価が変わるとともに刻々と変化する感情をとらえるのを主目的としたものであり、これら以外にも、ニュースについての感情反応が時間とともにどのように変化していったかなどといった質問も含まれていたが、これらに関する結果は割愛する。

### 3. 結果と考察

#### 3-1. 無反応に関連する要因

刺激事象ごとに「所詮自分には関係ないことだと思う」および「何も感じない」の2項目に対する評定値の平均を算出し、これを無反応得点とした。また、社会的スキル得点は、全項目の合計とした ( $M=55.85$ ,  $SD=10.48$ ,  $\alpha=.86$ )。無反応得点の $\alpha$ 係数は、.55~.73であり(表3)、刺激事象によっては低めの値を示したものもあるが、項目数の少なさによるところもあると思われるため、本研究ではこれらも許容範囲として、以後の分析に用いることとした。

無反応得点について刺激事象および個人特性による差異を検討するために、対人行動(2)×刺激事象(5)の2要因分散分析を各対人行動について行った。刺激事象は被験者内要因であった。被験者間要因である対人行動は次のように扱った。すなわち、家族または近所の人に対するあいさつに関しては、それぞれ、評定値1,2を「しない群」、評定値4,5を「する群」に分類した。社会的スキルについては、平均値を基準に低群/高群に分割した。

各刺激事象の群別無反応得点の平均(標準偏差)および分散分析の結果を表3に示した。被験者間要因を家族へのあいさつとした場合の分散分析の結果、対人行動の主効果が有意傾向( $F(1, 219) = 3.45$ ,  $p < .10$ , しない群 > する群)、刺激事象の主効果が有意であった( $F(4, 876) = 57.13$ ,  $p < .001$ )。同様に、被験者間要因を近所の人へのあいさつとした場合には、対人行動の主効果( $F(1, 201) = 13.78$ ,  $p < .001$ , しない群 > する群)、刺激事象の主効果が有意であった( $F(4, 804) = 36.93$ ,  $p < .001$ )。被験者間要因を社会的スキルとした場合には、対人行動の主効果( $F(1, 237) = 4.10$ ,  $p < .05$ , 低群 > 高群)、刺激事象の主効果が有意であった( $F(4, 948) = 75.60$ ,  $p < .001$ )。

刺激事象間の差異を検討するためにTukey法による多重比較を行ったところ、いずれの対人行動に関してもほぼ同様の傾向が認められた。共通部分のみ述べると、A1)履修漏れによる補習に対する無反応得点は、B1)スポーツ選手の活躍・A2)履修漏れによる補習(親しい人)・C)中越地震の被害・B2)スポーツ選手の活躍(親しい人)に対する得点よりも有意に高かった。また、B1)スポーツ選手の活躍・A2)履修漏れによる補習(親しい人)に対す

る無反応得点は、C) 中越地震の被害・B 2) スポーツ選手の活躍（親しい人）に対する得点に比べて有意に高かった。

表 3. 各刺激事象に対する無反応得点の平均（標準偏差）

刺激事象 <sup>1)</sup>	A 1) 履修漏れによる補習	A 2) 履修漏れによる補習（親しい人）	B 1) スポーツ選手の活躍	B 2) スポーツ選手の活躍（親しい人）	C) 中越地震の被害	対人行動の主効果 <sup>2)</sup>	刺激事象の主効果	交互作用
対人行動	$\alpha = .59$	$\alpha = .66$	$\alpha = .55$	$\alpha = .64$	$\alpha = .73$			
家族へのあいさつ						$F(1, 219)=3.45$	$F(4, 876)=57.13$	$F(4, 876)=0.73$
しない群 $n=58$	3.34(1.00)	2.61(1.09)	2.78(0.99)	2.12(0.95)	2.19(1.03)	$p < .10$	$p < .001$	n. s.
する群 $n=163$	2.96(1.15)	2.37(1.07)	2.63(1.11)	2.01(1.02)	1.96(1.01)	しない群 > する群 A1 > B1・A2 > C・B2		
近所の人へのあいさつ						$F(1, 201)=13.78$	$F(4, 804)=36.93$	$F(4, 804)=1.82$
しない群 $n=36$	3.46(0.97)	3.03(1.08)	2.99(1.00)	2.26(0.95)	2.67(1.43)	$p < .001$	$p < .001$	n. s.
する群 $n=167$	2.99(1.15)	2.32(1.04)	2.54(1.07)	1.97(1.02)	1.91(0.89)	しない群 > する群 A1 > B1・A2 > C・B2		
社会的スキル						$F(1, 237)=4.10$	$F(4, 948)=75.60$	$F(4, 948)=1.12$
低群 $n=117$	3.20(1.03)	2.62(1.08)	2.72(1.04)	2.11(0.98)	2.15(1.02)	$p < .05$	$p < .001$	n. s.
高群 $n=122$	2.98(1.19)	2.26(1.00)	2.62(1.10)	2.00(1.00)	1.92(0.99)	低群 > 高群 A1 > B1 > A2 > B2・C		

<sup>1)</sup> 社会事象の A 1), B 1), C) は一般的なニュースとして、A 2), B 2) はこれらが親しい人に起こったことからである場合として提示した。

<sup>2)</sup> 不等号は下位検定で有意差のみられた無反応得点の大小関係を示す。

以上から、家族や近所の人にあいさつをしない人や社会的スキルが低い人は、社会事象に対して無反応な傾向が高いことが示された。また、状況要因については、同じ事象でも親しい人に起こった出来事であれば無反応となりにくいこと、自然災害に比べて人為的な出来事の方が無反応であり、なかでも肯定的出来事よりも否定的出来事の方が無反応であることが示された。深刻さの異なる 2 つの否定的事象間でみられた差異から、刺激事象の重要性が高いほど何らかの感情反応に結びつき、無反応である可能性は低くなるといえよう。また、人為的な出来事は、自発的な関与がなければ身近に起こることを想定しにくい事象であるため、状況に対する関心が低くなりがちであるのかもしれない。

### 3-2. 無反応の意味

無反応であることの意味を把握するために、各感情反応項目に対する評定値を用いて、場面ごとに、階層的クラスター分析（Ward法、ユークリッド距離）を行った。クラスター分割は、各段階で結合される 2 クラスター間の非類似性をもとに行った。A 1) 履修漏れによる補習と B 1) スポーツ選手の活躍、C) 中越地震の被害に関する結果を図 1～3 に示す。A 2) 履修漏れによる補習（親しい人）および B 2) スポーツ選手の活躍（親しい人）についての結果は、それぞれ A 1) 履修漏れによる補習と B 1) スポーツ選手の活躍とほぼ同様であった。



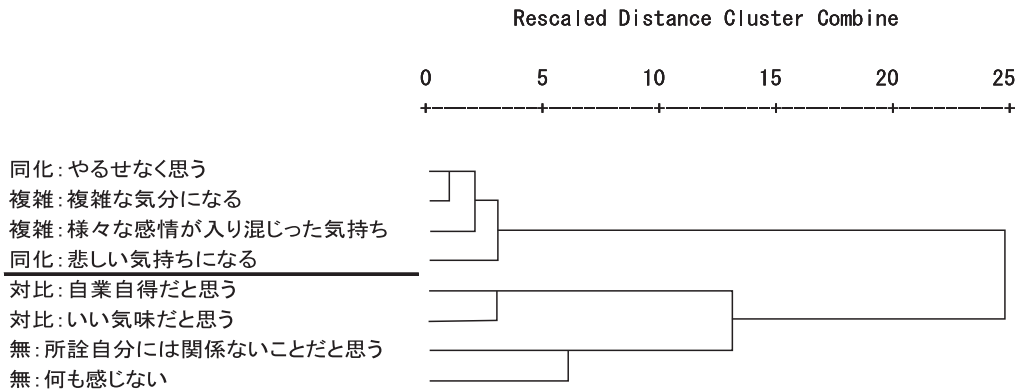


図1. 履修漏れによる補習に対する感情反応項目のクラスター分析の結果

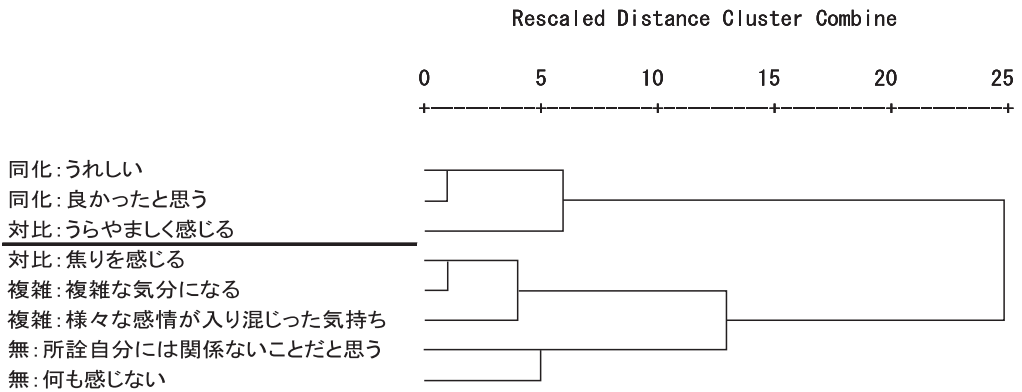


図2. スポーツ選手の活躍に対する感情反応項目のクラスター分析の結果

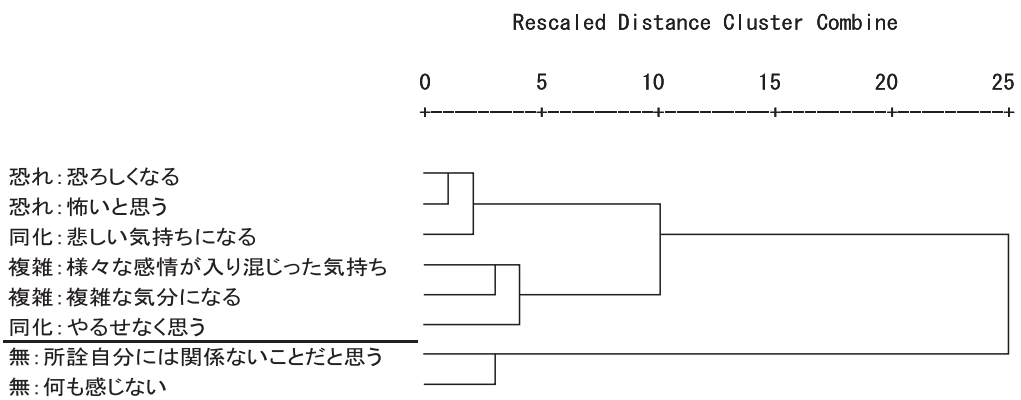


図3. 中越地震の被害に対する感情反応項目のクラスター分析の結果

分析の結果、いずれの刺激事象でも感情反応項目が2クラスターに分類された。しかし、各刺激事象の特質や刺激事象ごとにとりあげた項目も異なるため、刺激事象間でのカテゴリの比較検討は困難である。今回は、刺激事象別に無反応の意味を考えるために、無反応が含まれるカテゴリに注目して結果をみる。

A) 履修漏れによる補習では、無反応に関する項目は対比的感情に関する項目と同じクラスターに分類され、同化的感情と複雑な感情が同じクラスターに分類されうると判断した。無反応に関する項目が対比的感情に関する項目と同じクラスターに分類されたことから、この事象に対する無反応は、批判的・敵意的な意味をもちうるものであり、相手を突き放すような態度にもつながっている可能性があると考えられる。

B) スポーツ選手の活躍では、無反応、対比的感情の焦り、複雑な感情が同じクラスターに分類された。焦りと複雑な感情という内容から推察されるのは、焦燥感のような感情反応群である。このような刺激事象に対する無反応はこの焦燥感と関わっているといえよう。そして、履修漏れと比べると、自己の目標や対象との距離感を近く認識した反応ではないかと考えられる。

C) 中越地震の被害では、無反応項目とそれ以外の感情反応項目群の2群に分かれた。無反応のみが他の感情反応から独立している点が、他の刺激事象とは異なる。これは、否定的な結果を引き起こした原因が人為的なものではなく、自然現象にかかわることであり対処不可能という意識が働きがちなことからであることが関連するかもしれない。また、上記の2事象とは異なり、対比的感情に代わる感情反応として恐怖をとりあげたこともその一因であった可能性がある。

以上から、他者の達成場面における成功・失敗経験および対人関係上の成功・失敗経験に対する感情反応に関する研究（木野, 2006）で示唆されたように、無反応であるという回答は、実際には他者に起こった出来事に対する否定的な感情反応である可能性が本研究でも一部支持された。

### 3-3. 面接調査から

面接調査から得られた回答の概略を表4にまとめた。5人中4人は否定的事象のうち[C] JR福知山線脱線事故の被害に関する回答をしている。この他、否定的事象については[A] ライブドア社長逮捕に関する回答が1件、また肯定的事象に関しては[B] 荒川選手の金メダルについての回答が2件含まれており、回答対象となった事象にばらつきがある。加えて、最も印象に残るニュースとして[B] 荒川選手の金メダルをとりあげた2名には、さらに否定的事象に関する回答も求めており、一部のデータは回答者が重複している。しかし全体の回答者数が少ないこと、今後の研究に向けた資料的価値の重視から、今回はこれらを厳密に区別せず、

回答内容の検討を行うこととした。

社会事象に対して無反応である理由をたずねた際の回答には、次のようなものがあった。すなわち、ニュース自体に関心がない、社会の仕組みに関する知識・関心のなさ、自己中心的、発達レベルの問題、自分との関連づけができるか、知識不足、連想が及ばない、事態が大きすぎて対処不能という意識がある、感情が膨らまない、感情が色々膨らみ過ぎてシャットダウンした、感情がない恐ろしい人、などである。大まかには、自己中心的な認知と状況に対する統制可能性のなさに集約できよう。自己中心的な認知はHayamizu et al. (2004) でも言及されていることであり、また、身近な人に起こった出来事である場合の方が感情反応が起こりやすいという先の質問紙調査の結果を支持する回答といえよう。また状況に対する統制可能性については、否定的事象の〔C〕JR福知山線脱線事故の被害に対してのみ得られた回答であり、統制不可能であるという認知が、無力感や無気力と結びつくことを意味している。人為的な事象のほうが無反応を生み出しやすいという結果がみられた一方で、このような結果が得られたのは興味深い。例えば、地震など個人の力では統制不可能で、自分の身にいつ起こるかかわからないことは恐怖感などを引き起こすと考えられるが、それが高ければ無反応となりうるという考え方であろう。感情反応における認知の役割は、従来から指摘されるどころであり、Weiner (1995) が示したような原因帰属(認知)と感情反応の関連を考慮した検討の必要性を意味している。

第二に、実際の気持ちを隠すこととその理由については、何も感じていない場合はそれを隠して何かを感じているふりをする (No. 3, No. 5②)、何も感じていないふりをしない (No. 2) という回答が〔C〕JR福知山線脱線事故の被害に対してのみ3件みられた。その理由として述べられたことから、自分には直接関わりがないものであっても死傷者が出るような大事故に対しては、特定の感情反応を示すことが、他者との関係において重要であるという認識があることが確認できた。

第三に、無反応な人を含め、どのような感情を感じる人に好感をもつかをたずねた結果については、何も感じない人に対して好感を抱く人もあれば、他の感情を感じる人よりも評価が低い場合もみられた。何も感じない人への好感は、自分自身の反応と類似していることによるものが1件含まれていた (No. 2)。さらに、怒りや対比的感情といった敵意的な感情を示す場合よりは好感を示す場合もあった (No. 4, No. 5①)。その一方で、何も感じない人への最も低い評価が4件みられ、その理由としては関係を持ちづらいことがあげられており (No. 1②, No. 5②)、これは第二の質問へ回答と対応する結果といえよう。ただし、今回の面接データは少数の回答者によるものであり、各被験者が選択した話題や個人特性を踏まえてデータを整理した上で、より大規模なデータによる検討を行う必要がある。

表 4. 面接調査における回答の概要一覧

回答者番号	性別	印象に残ったニュース(理由)	質問①：何も感じない人について	質問②：実際の気持ちを隠すか(その理由)	質問③：どのような感情を感じる人に好感をもつか(好感を抱く順とその理由)
No.2	男	[C] J R 福知山線脱線事故	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分自身がそうである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>何も感じていない振りをしない。非道德的だから(今まで受けてきた教育や友人関係の考慮)。</li> <li>対人関係上、一番無難な答えをしてしまいがち。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>何も感じない【無反応】(自分と同じだから)</li> <li>⇒ 恐怖・怒り</li> <li>⇒ 悲しみ【同化的】(偽善だと思うから)</li> </ul>
No.3	男	[C] J R 福知山線脱線事故(出身地に近くなじみがあるから印象に残っている)	<ul style="list-style-type: none"> <li>ニュースに関心がない。</li> <li>遊び・自分に夢中だから。</li> <li>高校生以下である。大学になったばかりの人は気にしていない(発達レベルが低く、自己中心的側面が強いから)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>何も感じていないを隠す。人間らしくないと思われるから。いい人と思われたいから(偽善者)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>怒り(一番人間味がある)</li> <li>⇒ 悲しみ【同化的】(ただ悲しんでいるだけじゃ、役に立たない)</li> <li>⇒ 複雑</li> <li>⇒ 恐怖(絶対みんな思うことだから)</li> <li>⇒ 何も感じない【無反応】</li> </ul>
No.1 (回答②)	女	[C] J R 福知山線脱線事故	<ul style="list-style-type: none"> <li>他人事だと思う人。</li> <li>ひどい事故が起きたな、という認識だけで終わる人。</li> <li>何も感じない、っていうのは絶対ない。</li> <li>いろいろな感情がありすぎて、考えすぎてそこにたどり着く(シャットダウン)。</li> <li>感情を出さない人。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>感情を見せないのは、人に知られたくないから。つまり、弱みを見せたくないとか、自分をガードするため。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>悲しみ【同化的】・怒り</li> <li>⇒ 複雑(ぼっと見の表面的な感情なので、悲しいとか腹を立てるよりも深くない、浅い感情だから、あまり好感を抱かない)</li> <li>⇒ 何も感じない【無反応】(こっちから入れない。関係を持ちづらい)</li> </ul>
No.5 (回答②)	女	[C] J R 福知山線脱線事故	<ul style="list-style-type: none"> <li>車通勤をしていたり、J R の通っていない地域の人で、自分が関わっていないという意識の働き。</li> <li>自己中人で、関係のないところなら平気だから。</li> <li>自分と接しないので別世界のことと思ってしまう。</li> <li>出来事が大きすぎて、対処不可能という意識がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>何も感じていないというのは隠す。大事ことなのに関係ないというのは持ちたくない、相手に気持ちよくないだろうから。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>悲しみ【同化的】(自分と同じ)</li> <li>⇒ 複雑(そのことに疑問、問題意識を持っているので、話ができる)</li> <li>⇒ 恐怖</li> <li>⇒ 怒り(自分があまり怒りを感じないので、共感不可能)</li> <li>⇒ 何も感じない【無反応】</li> </ul>
No.4	男	[A] ライブドア社長逮捕	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分に影響がないから(株をもっていない、被害がない)。</li> <li>無関心な人。</li> <li>実用性を感じる力がない、連想できない。</li> <li>関連づけができない(社会の仕組み、知識レベル)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>隠さない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>複雑(いろんなことを考えられる人)</li> <li>⇒ 悲しみ【同化的】(心豊かな人、他人のことを考えられる)・何も感じない</li> <li>⇒ 自業自得【対比的】・怒り(否定的感情を見せられると不快)</li> </ul>
No.1 (回答①)	女	[B] 荒川選手のお金メダル	<ul style="list-style-type: none"> <li>感情が無い恐ろしい人?</li> <li>おかしい。</li> <li>冷たい。</li> <li>何も話さない。</li> <li>生育環境(家庭環境)としては、あまり人と接することなく、家族と接することもないような環境だったのではないか。テレビやゲームに向き合っている人間に成長しない、人と実際にやり取りすることが大切。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>周りの人と違うのを隠すため。</li> <li>「何も感じない」と答える人は、素直に自分の気持ちを言えない人ではないか。</li> <li>心の中で何か思っているとしたら、「すごい」とかではないか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>うれしい【同化的】</li> <li>⇒ 怒り(なぜそう思うのか聞きたい)</li> <li>⇒ 何も感じない【無反応】(取っ掛かりが無い)</li> </ul>
No.5 (回答①)	女	[B] 荒川選手のお金メダル(報道された時間、繰り返し報道が多いから印象に残っている)	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分との距離がありすぎるから。</li> <li>テレビに出ていること自体が違うから。</li> <li>実生活に影響がないから。</li> <li>地元の人やコーチなど直接関係のない人の話だから。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>うらやましい</li> <li>・あせりといった感情は隠す。嫉妬は醜いので人に見せたくない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>うれしい【同化的】(自分と同じ気持ちだから)</li> <li>⇒ 羨ましい【対比的】(自己成長につなげられるなら)</li> <li>⇒ 何も感じない【無反応】</li> <li>⇒ 怒り</li> </ul>

回答者No.1 およびNo.5 は、第二に印象的としたニュースについても同様の回答を求めた(回答②として示した)。

質問①：何も感じない人がいるとしたら、それはどのような人(またはどのような理由) だと思うか

質問②：実際の気持ちを隠すことがあるとしたら、それはなぜか

質問③：どのような感情を感じる人に好感をもつか(好感が高い順にあげ、その理由も)

### 3-4. まとめと今後の展望

以上から、社会事象に対して無反応であることは、社会的スキルの低さや家族および近所の人へのあいさつをしないなど、自分以外への他者への関与の低さとの関連が示された。また、同じ社会事象でも親しい人物に起こった出来事ではない場合の方が、無反応な傾向が高いことが示され、面接調査によってもこれらの結果は支持された。これらを考え合わせると、次のような推測が可能ではないかと思われる。すなわち、身近な人へのあいさつなど他者との交流を行い、社会的スキルを身につけることにより、他者との交流が活発化し、他者事象に対する関心も強まり、何らかの感情反応生起につながるという過程である。ただし、この因果関係については明確に検証されていない。また、刺激事象によって無反応の意味が異なる可能性が考えられた。結果の解釈にあたっては、無反応が意味する内容をより正確に把握することも必要である。加えて、無反応であることは、対人関係上最も低い評価を受ける場合ばかりではなく、敵意的な感情を抱くよりは好感がもたれる可能性も示された。少数の重複データに基づく結果ではあるが、感情が対人関係の中で果たす役割を考えていく上では興味深い示唆が得られたと考える。

しかし、とりあげた刺激事象の意味づけについては不十分な点が残る。否定的事象については、質問紙調査では深刻さの違いを想定して2場面用意したが、これらの2場面の間には、例えば、被害にあった人の数の多さ、被害にあった人が回答者にとって同一視しやすい対象かなど、深刻さ以外にもさまざまな差異がある。現実場面で起こった事象を扱う場合にはこれら全てを厳密に統制することは難しいが、今後は複数の次元に配慮して刺激事象を抽出し、想定したとおりの状況であったかの操作確認も行う必要がある。

さらに、無反応の項目の少なさと項目内容は改善の余地があろう。特に項目内容について、「所詮自分には関係のないことである」は、他者への関心のなさの指標ともとらえるものであり、再度吟味する必要がある。

本研究では無反応に焦点をあてて検討を進めてきたが、無反応であることをより正確に把握するためには、無反応以外の同化的感情や対比的感情などの生起を含めた感情経験の混在の様相やこれらの変化過程の検討も行っていくべきであろう。感情は時間の経過や認知変容により変化する複雑なものであり、また、感情反応が対人関係に及ぼす影響に関する認識（知識）もその変化過程に影響を与えていると考えられる。今回の面接調査については、感情変化のプロセスなど未分析の内容もあり、今後はこの点についてのデータ整理を進める必要がある。探索的ではあったが、今回得られた知見を足がかりに、青少年の感情理解に関する知見の蓄積やその発展、ひいては社会性の発達支援・教育への応用に寄与する研究につなげていきたい。



#### 4. 引用文献

- Goldstein, A. P., Gershaw, J. N., & Sprafkin, R. P. 1984 Structured learning therapy: Background, procedures, and evaluation. In D. Larson (Ed.), *Teaching psychological skills: Models for giving psychology away*. Monterey, CA: Brooks/Cole. pp. 69-87.
- Hayamizu, T., Kino, K., & Takagi, K. 2007 Effects of age and competence types on the emotions: focusing on sadness and anger. *Japanese Psychological Research*, **49**, 211-221.
- Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K. & Tan, E. 2004 Assumed-competence based on undervaluing others as a determinant of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, **5**, 127-135.
- 速水敏彦・丹羽智美 2002 子どもたちの感情はどのように変化したか ―教師の目から見た特徴― 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）, **49**, 197-206.
- 巖倉奈々 2001 感じない子どもころを扱えない大人 集英社
- 唐沢かおり 1996 認知的感情理論―感情生起にかかわる認知評価次元について― 土田昭司・竹村和久（編）対人行動学研究シリーズ4 感情と行動・認知・生理―感情の社会心理学― 誠信書房 pp. 55-78.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する―向社会的行動の心理とスキル― 川島書店
- 木野和代 2006 有能感と他者事象に対する感情反応―他者事象に対する無関心・無感情に焦点をあてて― 日本心理学会第70回大会発表論文集, 1032.
- 澤田匡人 2005 児童・生徒における妬み感情の構造と発達の变化―領域との関連および学年差・性差の検討― 教育心理学研究, **53**, 185-195.
- 澤田匡人 2008 シャーデンフロイデの喚起に及ぼす妬み感情と特性要因の影響―罪悪感, 自尊感情, 自己愛に着目して― 感情心理学研究, **16**, 36-48.
- Smith, R. H. 2000 Assimilative and contrastive emotional reactions to upward and downward social comparison. In J. Suls & L. Wheeler (Eds.), *Handbook of social comparison: Theory and research*. New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers. pp.173-200.
- Weiner, B. 1995 *Judgments of responsibility: A foundation for a theory of social conducts*. New York: NY, Guilford Press.
- 山本（西隅）良子 2005 「三項関係情動」の生起メカニズムを探る―共感的喜び・妬みの状況要因について― 京都大学大学院教育学研究科紀要, **51**, 371-385.
- 山本良子 2007 他者の不幸を悲しむ情動, 喜ぶ情動―面接調査から把握されたその実態― 京都大学大学院教育学研究科紀要, **53**, 273-285.
- 山本良子 2009 共感的喜びと妬みの発生に関与する状況要因 東京大学大学院教育学研究

科紀要, **49**, 237-245.

### 謝辞

本研究は科学研究費補助金若手研究（B）（課題番号18730423）および2006年度広島国際大学特別研究助成の補助を受けた。

## **A preliminary study of emotional irresponsiveness toward the social events: its personal and situational factors, its connotations, and its interpersonal impression.**

Kazuyo KINO

The purpose of this study was to clarify the personal and situational factors of emotional irresponsiveness toward social events, and to investigate the connotations and interpersonal meanings of emotional irresponsiveness. A set of questionnaire, about (1) emotional reactions toward different types of social events, (2) greetings to family and neighbors, and (3) social skills, was administered to 249 adolescents (mostly undergraduates). And five of them were also interviewed about their impression of a person who was emotionally irresponsible toward social events. It was shown that adolescents with less concern for others tended to be emotionally irresponsible toward social events, and adolescents generally tended to react emotionally when the events were occurred to familiar person. It was also suggested that emotional irresponsiveness did not mean they felt nothing at all but instead implied contrastive and complicated emotions in some cases. And the results of interviews with five participants showed that they regarded emotionally irresponsible persons as self-centered and that their interpersonal impression on others was not good.